
編集後記

2020年は、東京大学経済学図書館創設120年、アダム・スミス文庫寄贈100年という記念すべき年であった。しかし残念なことに、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の猛威を前に、記念のオンライン講演会を開催することがやっとなかった。図書館も資料室も未だ従前の活動ができる状況にまでは戻っておらず、現時点で先の見通しはたっていない。

一方で、在宅勤務が基本となったことにより、これまでなかなか手が付けられなかった撮影や資料調査のデータ整理、資料の翻刻・分析・研究などに時間を割けたことは、言わば怪我の功名であった。

今号に掲載した論考等は、上述の記念行事関係の記録、在宅勤務によるデータ整理、資料分析の成果に基づくものが大半を占めている。また、現在までの東京大学経済学図書館・経済学部資料室のCOVID-19への対応について、アーカイブズに関わる機関の責務として、ありのままを公表することとした。内部資料をなるべくそのままの形で出すこととしたため、一部に読みづらい箇所もあるが、ご了承願いたい。このほか、資料室員が参画する科研費共同研究の成果も掲載されている。執筆者各位にはこの場を借りて厚く御礼申し上げる。

さて、本号編集中の2021年1月29日に、元国立国会図書館副館長の安江明夫氏が腎細胞がんのため逝去された(享年75)。安江さんは日本における図書館資料保存の第一人者といってよく、今に至る日本の資料保存の理論的支柱であったといっても過言ではない。安江さんの訃報は、まさに「資料保存研究の第一世代の巨星墜つ」というほどの衝撃であり、痛恨の極みと言うほ

かない。後述するように、当室にとって安江さんはその存立基盤に関わる大きな影響を与えた方でもあり、この場を借りて追悼の一文を草することをお許し願いたい。

筆者が安江さんと親しくさせていただくようになったのは、安江さんが国立国会図書館を定年で退官されてからである。はじめてお会いしたのは、確か2006年であったと記憶する。ちょうど、東京大学経済学部資料室として、活動の力点を資料保存に置くという方向転換が図られた直後のことであった。安江さんは、東洋文化研究所で開催されたワークショップにおける筆者の講演レジュメを入手され、興味をもっていただいたようで、第三者を介して私に面会の申し入れがあった。いま考えるに、当時、若気の至りで勢いだけはあったものの、酸化劣化と酸性劣化の区別もまともについていない筆者に危うさを感じ、なんとか軌道修正を図らせたいというような、親心に似た気持ちであったのではないだろうか。爾来十五年、折りに触れて声がかかり、安江さんが計画する勉強会の講師や、編集される本の執筆陣に加えていただいた。論文の抜刷も送っていただいた。

しかし、個別に時間をかけて教示を受けることができたのは、最初にお会いした時だけで、その後はお互いに多忙なこともあって、じっくり安江さんの話をうかがう機会を逸してしまった。いつも別れ際に「いろいろ話したいんだけど、また今度。」と言われるのがお決まりであった。結局、年に何度もお会いしているにもかかわらず、筆者は、安江さんの勉強会や本を編集する後ろ姿を見ることができなかった。このことが、本当に悔やまれてならない。

安江さんの資料保存は、全てにおいてプリザベーションがその根本にあったと思う。プリザ

ベーションという英語でしか表現し得ず、日本語においていまだ馴染めていない言葉を、日本の図書館界になんとか定着させたのは、安江さんの大きな功績であろう。東京大学経済学部資料室は、資料保存のマネジメントつまりプリザベーションを徹底して実践している日本で数少ない組織の一つであると自負しているが、そもそも安江さんの研究の成果がなければ、こういった組織を作り上げることは不可能であった。

本年、当室では「書き込み式図書館資料保存の基本」というチャート式のポスターを作成し、全国の主要図書館に配布した。このポスターに込められた意図の一つは、安江さんが定着させたプリザベーションについて、さらなる理解を促そうというものであった。これは、安江さんから受け取ったプリザベーションの理解と普及というバトンに対する、現時点での筆者らなりの回答であったのだが、既に闘病されていた安江さんから論評を頂けなかったことが残念である。

冒頭に安江さんのことを「理論的支柱」と書いたが、安江さんは決して単なる頭でっかちの研究者ではなかった。『論語』に「子曰く、先ずその言を行い、しかるのちにこれに従う」（「子曰、先行其言、而後従之」『論語』為政）という一節がある、要は「口先だけでなく、まず行動で示す者こそ紳士である」ということである。安江さんは

「不言実行」というより「有言実行」の人であった気がするが、ともかく『論語』の一節のように即行動する研究者であったと思う。海外の図書館や資料館に資料保存の指導に行ったかと思えば、東日本大震災の時には「東京文書救援隊」を資料保存器材の木部徹さんらと組織して、被災した紙資料の救援・支援に尽力したりと、まさに世界を駆け巡る資料保存の救世主であった。一昨年、筆者がベトナム国家図書館を訪問した際にも、資料保存を指導した一人が安江さんで、その時の様子を収めた写真が今でも図書館の修復部門の部屋に貼られていて驚かされた。そういった行動力の源泉はいったい何であるのか、安江さんに尋ねることはもうできないが、おそらく人間の知的営為の結晶である本や人間の意思決定の記録である文書、それらを時代を超えて保存する使命を帯びた図書館や文書館という場を、安江さんが心底大切に思っておられたからではなかったのか。

幸い、安江さんは著書や論文の形で、我々後進に沢山のメッセージを残してくれている。これを図書館や文書館に関わる者がどのように受け止めて行動するか、きっと天空から見守ってくださっていることであろう。「それは違う、そこはこうだ。」と言いたいのをぐっと堪えて、苦笑いを浮かべながら。 (小島浩之)